

母親が「先生」であることによる母子関係への影響

—小中学校教員の子どもに着目して—

内田早香・岡本祐子

Impact on mother-child relationships on the female children of mothers working as teachers:
a study of the children of elementary and junior high school teachers

Sayaka Uchida and Yuko Okamoto

The increasingly busy workloads of teachers have been identified as posing particular difficulties in the compatibility between teaching and child rearing. Teaching while child-rearing is considered to be particularly difficult for female teachers. Although it is not solely a mother's responsibility to balance the roles of teacher and parent, children may be affected by a parent's heavy teaching workload. The current study examined the influence of the mother's teaching job on their children. We conducted a qualitative analysis of children's occupation-related experience, particularly among female children, who are considered to be most strongly affected by their mothers. The results revealed that female children whose mothers were teachers reported various occupation-related influences on their recognition as individuals (e.g., my mother cannot fulfill her mother role because of her teaching job), recognition in the mother-child relationship (e.g., teacher-like mothers), and social recognition (e.g., experiences of being treated differently because they were the child of a teacher).

キーワード : teachers' children, work-life balance, mother-child relationship

問 題

1. 教員の就業事情・職業ストレスについて

教員の仕事は年々増加の一途をたどっており、教員の多忙化の問題は 1950 年代から指摘されているにもかかわらず（神奈川県教育研究所，1952），今なお深刻な問題となっている。2016 年に全国規模で行われた最新回の教員勤務実態調査の集計（速報値）（文部科学省初等中等教育局，2017）によると、教員の平均勤務時間は、小学校教員で 11 時間 45 分、中学校教員で 11 時間 52 分、残業時間が過労死ラインである月 60 時間を超えている割合が、小学校で 33.5%、中学校で 57.7%となっている。

ある中学校職員室の疲弊に焦点を当てた参与観察を行った落合（2009）によると、中学校教員は朝の 7:30 から夜の 7:30 頃まで、休み時間も教員同士の連絡や授業準備、生徒への対応に追われ休みらしい休みもない中、12 時間にも及ぶ勤務に携わっているという実態が観察された。また、他

の研究報告からも日本の学校現場全体が、このようなストレスフルな仕事の在り様であることは見て取れるとしている。

また、佐藤 (1994) は、教師文化の先行研究などから、教師の仕事を「再帰性」「不確実性」「無境界性」の3つから特徴づけた。「再帰性」は、教師の仕事の責任が「どこにもやり場のない」ものであり、教師は教育実践について、恒常的な孤独と不安にさらされていることなどを示す。「不確実性」は、教育の実践現場においてどの教室でも確実に効果的な教育理論や技術ではなく、教師の実践を客観的に評価できる安定した基準は存在せず、何がよい教育なのかも多種多様で、教育の結果も見えにくいものであることを示している。「無境界性」は、上記の教育の2つの特徴によって、職域・責任領域が無制限に拡大され、その専門性が空洞化することを示す。たとえば、子どもの問題行動に際して家庭など学校以外の領域に踏み込まざるを得ないことや、ほかの専門職と異なり、患者の完治や事例の解決などのような明確な仕事の完了がないことが挙げられる。さらに、「無境界性」は恒常的な多忙を引き起こすだけでなく、教師の仕事を雑務の領域で多忙なものとし、専門性から遠い部分で、疲労とストレスを招いている。

以上のことから、教員は「どこにもやり場のない」教育実践上の責任をひとりで背負って、自分の仕事について確実な安定した評価の得られないなか、拡大する職務領域に対応していくことで、恒常的な多忙とそれによる疲労・ストレスを抱えながら、長時間労働をしていることが分かる。

2. ワーク・ライフ・バランスについて

近年、そうした教員の長時間労働や多忙化により、教員の仕事時間が生活時間を削らせている現状を踏まえ、ワーク・ライフ・バランスの考え方から、教職にアプローチする研究が見られる。これらは、それまでの教員の労働についての研究のなかでは、職務遂行に大いに影響を与えることが予想される仕事以外の生活時間や、家庭生活などについてほとんど検討がなされていないことを指摘し、生活時間や家庭生活に踏み込んだ内容となっている (高橋・濱岡・勝沼, 2009: 田野井・水本・大久保, 2012: 直井・佐藤, 2013 など)。

また、第5回学習指導基本調査 (ベネッセ教育総合研究所, 2010) においても、「学習指導」「子どもとの関係」「保護者や地域との関係」「現在の職場」の4項目と合わせて、「教員生活と私生活とのバランス」について、どのくらい満足しているか尋ねている。主な仕事内容である教材等の準備が満足にできているか尋ねた「学習指導」と、「教員生活と私生活とのバランス」の2項目についてのみ4~5割が満足していると答え、その他の項目については約7~8割が満足していると答えており、「教員生活と私生活のバランス」についての満足度は低めとなっている。しかし、ワーク・ライフ・バランスの満足度は日本全体として低い傾向にあるため、教員について特に低いとは言えない。ただ、教職は企業勤務等と異なり、残業や休日出勤について、保護者や生徒などの外部から、「献身的な先生」「熱心な先生」というふうな肯定的な評価を下されがちであり、積極的にワーク・ライフ・バランスを追求しようとする姿勢が取りにくい環境であることが予想される。

教員のワーク・ライフ・バランスに関する先行研究として、田野井ら (2012) の研究においては、関東圏内にある政令指定都市の公立中学校教員260名を対象に、質問紙調査を用いた量的分析によって、教員役割と、生活における自分役割との役割葛藤が、仕事と生活のバランスに及ぼす影響に

ついて検討している。その結果、教員が自分役割を行うための生活時間を削って教員役割に従事していることなどが実証された。

また、直井ら (2013) の研究においては、茨城県水戸市内の公立中学校教員 85 名を対象に質問紙調査によって、ワーク・ライフ・バランス達成度と、またその個人の基本属性、家庭状況、仕事状況と仕事に対する意識との関連を検討している。まず、ワーク・ライフ・バランスについては全体の 94.1% が達成されていない状況であった。また、中学校教員のワーク・ライフ・バランスの達成には、年齢の低い手のかかる子どもがいない、あるいは親など家事の担い手が自分のほかに確保できるなど、家庭の責任がないことが、重要であることが示唆された。

さらに、新潟市の公立小中学校教員 86 名を対象にワーク・ライフ・コンフリクトなどについて検討した高橋・濱岡・勝沼 (2009) によると、家事負担の大きい女性のほうが男性よりも仕事領域から家庭領域へのコンフリクトが高いことが示された。また、考察において、質問項目の中で平均点の高かった項目として、「自分が家族と過ごしたい時間を思っている以上に仕事にとられる」、「仕事に時間がとられるため、仕事と同様に家庭での責任や家事をする時間がとりにくい」、「職務を果たすのに多くの時間を使うため、家族との活動ができないときがある」、「仕事から帰ったとき、くたくたに疲れていて家族と色々なことをしたり家族としての責任を果たせないことがよくある」、「仕事から帰ったとき、精神的に疲れきっていて、家族のために何もすることができないことがよくある」が挙げられている。

3. 教員の子育てについて

1, 2 で取り上げた先行研究の中での教員の子育ては、主に教員という職務を遂行する上で、子育てや家庭生活の充実がどのように関わってくるか、という視点であった。大谷 (2009) は、女性教員の資質や生活について子育ての視点から検討している。また、大谷 (2009) によると、近年それ以前に教員の子育てについて調査した研究は、1910～1930 年代の女性教員の職業と家庭の両立問題に各地域の女性委員会がどう取り組んだか分析した齋藤 (2008) や、高橋・濱岡・勝沼 (2001) の 1940 年代に師範学校を卒業し教員として働いた女性たちに教員生活と子育ての両立についてヒアリング調査した研究などがあるが、これらは歴史的な研究であり、また数も少ない。

高橋ら (2001) の調査によると、ヒアリングした当時の女性教員たちは、仕事と家事・育児との両立ではなく、子守りや親類縁者等の他者に任せることで教員を続けていたことが伺える。ヒアリングの中で、「親として学校に行ったのは、上の子の小学校 1 年生の 1 学期末の個人面談のみ」というコメントもあり、その当時は教師でありながら自分の子どもの教育にはほぼ参加できなかった面も見える。

また、大谷 (2009) は子育て中の女性教員と保育士が直面している問題について調査しており、調査対象は一地域であるが、現代でも、子どもの教育に携わっているながら、教員・保育士のままでは自分の子どものための時間を十分にとれないという現状が伺えると述べている。さらに、教員のライフコース研究においては、出産や育児は女性教員にとってかなりの負担となることから、教職の危機として取り上げられており、出産・育児を直接の原因として離職するケースも少なくない (佐藤, 1994)。教員のライフコースとキャリアについて研究した細江 (1996) によると、1993 年に退職

者を含む 2262 人の回答を得た「教職員の生涯生活設計に関する実証的研究」の調査研究から、女性教員の退職前辞意理由は「家庭との両立」が最も多く約半数を占めており、また辞めたいと思う理由についても、子育て期にあたる 30～39 歳では「家庭との両立」が約 8 割を占めていた。このことから、女性教員にとって、子育て期の仕事と家庭との両立は大きな課題となり得ることが分かる。

しかし、こうした教員のワーク・ライフ・バランスや家庭生活、子育てに関する研究は、研究数自体が多くない。また、研究分野としても経済学や社会学的な視点で取り上げられたものがほとんどであり、教員の職業継続や職務遂行上のパフォーマンスの問題に帰結して制度上の改善を訴えるものが多く、家庭生活への影響が取り沙汰されているにも関わらず、純粋に教員の家庭生活の面へのアプローチ、女性教員の教職の危機の一つとされる子育てについて、心理学的視点から研究がなされたものはほとんど見られない。

4. 母親の養育態度・行動と就業との関連

母親の養育態度・行動は、子どものあらゆる発達に影響を及ぼす重要なものである。それらを規定する要因は、夫婦関係や社会的ネットワーク、就業、パーソナリティなどあらゆるものが存在する。特に就業については、母親の就業が一般的になるに従い、就業の有無による検討に始まり、勤務スケジュールや仕事量などの就業特性や職場ストレスによる家庭や子どもへの影響についての研究が国内外でなされてきた。以下、母親の養育態度・行動と就業との関連について、①多重役割理論、②職業ストレスの二つに分けてレビューする。

①**多重役割理論** 就業する母親を捉える理論として、多重役割理論がある。これは、仕事や子育てなど親が複数の役割を担うことと、親の心身の状態の関連を説明／予測する理論であり、多重役割を担うことの負担感や疲労を重視する役割荷重仮説と、複数の役割を担うことで社会的アイデンティティが蓄積され、自尊心や充実感が高まるとする役割増大仮説である。この理論を基に、母親の労働時間の長さによって、しつけや情緒的支援といった養育行動の質や、家庭環境の違いが検討されているが、労働時間が長いと養育行動の質が低下しており、短いほうがより豊かな家庭環境を提供していることが確認されている (Bogenschneider, Small & Tsay, 1997 ; Percel & Menaghan, 1994)。

また、この理論を基に、Roeters, Lippe & Kluwer (2010) は、オランダに住む学童期の子どもを持つ母親 929 名を対象に、就業特性と親子関係の質の関連を検討した。そして、週末勤務や夜間勤務といった脱標準型勤務スケジュールが母子間の共有行動の頻度を高める場合も、阻害する場合もあり、それが母子関係の質に良くも悪くも影響することが確かめられた。これを踏まえて、Roeters et al (2010) は、就業特性が親子関係に与える影響はコンフリクトな部分と恩恵を与える部分の両面があることを認識することが重要であるとしている。

以上の研究を鑑みると、役割荷重仮説と役割増大仮説は、どちらかが就業と養育態度・行動について規定するものではないと考えられる。

②**職業ストレス** 末盛 (2011) によると、職業ストレスが家族や子どもに与える影響について、日本ではほとんど検討が行われていない。しかし、米国の研究においては関心を集めた要素であり、仕事に対して満足している母親は、子どもに対してより許容的に温かく接し、また自分が働いているという子どもに対する罪悪感から、その補償として子どもに対してより優しく接すると考えられ

ている (Raillings & Nye, 1979)。逆に、仕事に不満足な母親は、子どもに対してより拒否的、放任的に接するようになり、適切な関わりができなくなる。こうした場合、子どもの心理状態は不安定になり、問題行動も生じやすいとされている (Hoffman, 1963 : Raillings & Nye, 1979)。

米国の先行研究において、母親の職業ストレスの高まりが、親子関係の質の低下を生み、子どもの問題行動などに影響を与えているという結果を示す研究は多く、職業ストレスに基づく母親の就業による子どもへの影響の仮説は基本的に支持されていると言ってよいだろう (末盛, 2011)。

5. 親の職業が子どもに与える影響

親の職業が子どもに与える影響については、主に職業継承の研究としてなされてきている。小川・田中 (1985) は、職業継承性の高い小中学校教師、大学教師、建築設計士の子どもの職業選択に及ぼす親の職業的影響を調査し、親の子どもに対する継承期待の有無、親の指導様式 (親主導—子主導、親同一化—親異質化、職業選択にあたっての配慮) といった親の職業的態度と子どもの年齢及び学歴が、子どもの職業継承性の規定因として重要であることを示した。また、小川・田中 (1981) では、親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響について検討されており、母親の職業よりも父親の職業の継承希望のほうが大きい傾向があること、父母の職業継承期待を担う娘は父母の継承期待を受けない娘に比べ、継承希望率が優位に高く、親の継承期待が娘の継承過程を媒介していると考えられることが示されている。

一方で、親の職業による子どもへの心理的影響を検討した研究は、佐藤 (2015) による親の職業と青年期の子どもの親子関係との関連の研究しか見られない。佐藤 (2015) は、親の職業という所与の環境によって、青年期にある子どもたちがどのような心理的経験をしているのか、職種によって心理的経験に差異が生じているのか、また親子関係に関連は見られるのか、中学生～大学生 1896 名を対象に質問紙による調査を行っている。この質問紙の質問項目の大部分は佐藤 (2015) がこの調査のために独自に作成したものであり、親の職業から受ける影響 (24 項目 6 因子 : 親の職業を加味して評価される経験・親の職業を継ぐことの要請・親の職業をほめられる経験・優秀であるようにとの要請・問題を起こさないようにとの要請・親の職業が身近であること) や、親の職業に対する評価 (12 項目 2 因子 : 親の職業に対する肯定的評価・親の職業に対する忌避的感情) などであった。

その結果、親の職業に対する評価が親に対する肯定的感情に寄与していることが示された。つまり、親の職業を良いものと見なせる程度が高いと、親に対する肯定的感情が増し、逆に、親の職業に対して忌避的感情を持っていると、親に対する肯定的感情を低下させてしまうということである。そして、人より優秀であることを要請されることについては、親に対する忌避的感情を直接低下させる要因にもなっていた。

また、親の職種間による違いについては、アイデンティティ形成の程度とセルフエスティームの得点には有意差が無く、親に対する肯定的感情にも有意差は見られず、親の職業の違いが人格の発達や親子関係に影響を及ぼすことはないことが示された。しかし、親が教員あるいは医者、看護師といった社会貢献度の高い職業に就いている場合、親の職業を加味して自分が評価されたり、親と同じ職に就くかのように見られる経験、親の職業をほめられる経験の多さ、親の職業をいい職業だ

と認識する高さといった特徴も示されている。特に親が教員である場合の特徴は、優秀さの要請が職に就く意識の高さと関連しており、ポジティブに機能していると見られることであった。また、親の職業に対する肯定的評価、親に対する肯定的感情も職に就く意識を高めており、概して親に関連する変数が職業に関する変数とポジティブな関連を示していた。

親の職種の違いによる心理的経験に差異があるにも関わらず、職種間で人格的発達や親に対する肯定的感情に差が出なかったことについて佐藤 (2015)は、親の職業をほめられる経験は親の職業への肯定的感情につながり、親が社会貢献度の高い職業に就いていることで、親への肯定的感情や同じ職業に就こうとする気持ちを持ちやすくなることもある一方で、親の職業を加味して自分が評価されたり、親と同じ職業に就くかのように見られる経験、優秀であることの要請などに対して、子どもが反発やプレッシャーを感じ、このような環境に置かれたのは親が“特別な職業”についているせいだと感じて、親の職業を疎ましく思い、親に対する肯定的感情まで低下してしまうこともあると推察している。このことから、親が教員であることを肯定的に捉えるケースと否定的に捉えるケースがあることが推測される。親が教員である場合の特徴は、優秀さの要請が職に就く意識の高さと関連しており、ポジティブに機能しているとみられることであった。また、親の職業に対する肯定的評価、親に対する肯定的感情も職に就く意識を高めており、概して親に関連する変数が職業に関する変数とポジティブな関連を示していた。

6. 母親の教職が子どもの母親像形成に及ぼす影響

内田・岡本 (2016) は、母親が小中学校教員である子どもに対して面接調査を行った。対象者のうち女性は6名であった。そのうち2名は教員志望であり「母親のような母親になりたい」と職業選択と母親像の両面で自身の母親との同一化を目指す語りが見られた。他4名は「子どもがかわいそうだから」と教職を忌避する語り、母としての母親に対しては肯定・否定どちらも含む語りが見られた。このことから、教員の子どものうち、特に女性について、自身の職業選択と目指す母親像の形成が密接に関わっていることが考えられた。

また、内田・岡本 (2016) より、小中学校教員を母親に持つ子どもは心理的経験を通して心理的葛藤を抱いて教職に忌避的になっている場合と、あまり心理的葛藤を抱かず教職に肯定的になっている場合があることが分かった。また、そのことには Figure 1. に示したように、子どもが母親・母親の教職から影響を受ける内容の差異が影響を及ぼしていることが示された。

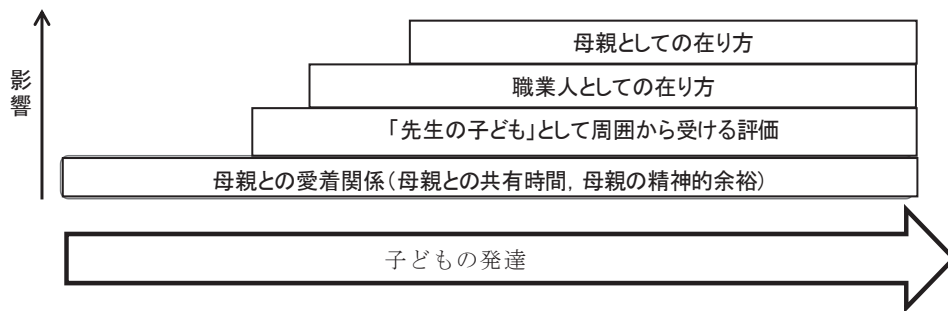


Figure 1. 子どもが母親・母親の教職から影響を受ける内容

Figure 1.について、若干の説明を加える。以下、子どもが母親・母親の教職から影響を受ける内容を【】で示した。まず子どもの誕生と共に始まる【母親との愛着関係(母親との共有時間, 母親の精神的余裕)】が、児童期以降は「母親に何でも話せる」「母親は分かってくれる人」といった子どもの感覚、また心理的葛藤を抱えて悩んだとき母親に限らず他者を信頼して相談し、共有して解決する能力に繋がると考えられた。そのことによって、次の【「先生の子ども」として周囲から受ける評価】で「性格や成績を決めつけられる, 期待される」「将来の職業を教師を決めつけられる」等のネガティブな経験をして、母親をはじめとした他者に相談する、共有することで心理的葛藤が緩衝されると考えられた。

【職業人としての在り方】は、まず職業選択に際して、家庭でも学校でもモデルのいる教師を選びやすい傾向が考えられる。そんな環境の中で、【母親との愛着関係】【「先生の子ども」として周囲から受ける評価】といった経験の影響を受けて、たとえば「子どもに同じ寂しい思いはさせたくない」と児童期の時点で教職に忌避的なケースもある。二つの経験の影響を受けながら、職業選択をしていくと考えられた。

【母親としての在り方】は、職業選択とも密接に関わってくるが、まずは職業選択に際して、仕事と子育ての両立について考慮する度合いが、【母親との愛着関係】【「先生の子ども」として周囲から受ける評価】の経験の内容、子ども時代の働く母親に纏わる心理的葛藤の程度によって異なると考えられる。そして、最終的な職業選択の影響も受けながら、自身の母親としての在り方を考える と推測された。

以上より、育児との両立に困難が指摘される小中学校教員である母親と同様に、養育を受ける子どもの側も、母親の長時間労働による共有時間の短さ、母親の職業ストレス、教員という職業に起因する周囲からの評価等より、心理的適応から職業選択に至るまで様々な影響を受けていることが予想される。しかし、教員の子どもについて、親の職業から受ける心理的な影響について質的に調査された研究はほとんど見られない。教員の子どもについて質的に調査することは、今後の教員の子育て支援や、カウンセリングなどにおける「先生の子ども」の理解と支援に繋がると考えられる。

また、佐藤(2015)や内田・岡本(2016)から、母親が教員であることや教員である母親に対して、子

どもが葛藤を抱くケースとあまり葛藤を抱かないケースがあることが推測され、多様な有り様が推察される。また、特に女性の子どものほうが、自身も母親になっていく可能性があることから、母親からの影響を大きく受けて自己形成をしていることが推測される。対象者を女性とすることで母子関係についてより詳細な検討が可能であると考えられる。

目的

本研究では小中学校教員の子ども、特に女性を対象に、独特の母子関係や「先生の子ども」独特の経験を経ての職業選択を基準としたプロセスを検討することを目的とする。また、調査対象者に多様な有り様が予想されるため、多様な人生の径路を時間を捨象することなく扱うことができる視線径路・等至性モデル (以下、TEM) を用いて分析することとする。

方法

対象者 小中学校教員をしている (または対象となる子どもが少なくとも高校在学中まで勤務していた) 母親をもつ 20~30 代の社会人または職業選択が済んでいる学生の女性 10 名。調査対象者を Table 1 に示す。

Table 1. 調査対象者プロフィール

| ID | 年齢 | 職業 | 家族構成 | 母親の教科 |
|----|----|----------------|-----------|-------|
| A | 24 | 公務員 | 父-母-姉-A | 小学校 |
| B | 27 | バイト→カフェ経営→派遣社員 | 父-母-姉-B | 中学校 |
| C | 30 | カフェ経営→バイト | 父-母-C-妹 | 中学校 |
| D | 36 | 中学校教員 | 父-母-D-弟-弟 | 小学校 |
| E | 24 | 小学校教員 | 父-母-姉-姉-E | 小学校 |
| F | 26 | 小学校教員 | 父-母-F-妹-妹 | 小学校 |
| G | 25 | 小学校教員 | 父-母-G-弟 | 小学校 |
| H | 23 | 大学生 | 母-兄-H-妹 | 小学校 |
| I | 23 | 大学院生 | 父-母-兄-I-妹 | 小学校 |
| J | 24 | 栄養士→専業主婦 | 父-母-姉-J | 小学校 |

手続き 対象者は縁故法とスノーボール法にて募った。回想法を用いた半構造化面接を実施した。面接調査実施前には研究の目的とプライバシーの遵守についての説明、IC レコーダーによる録音及び筆記記録の許可の確認、また質問に無理に答える必要はなく、いつでも面接をやめることができる旨を明記した研究参加同意書に署名を求めた。また、面接の実施場所は、プライバシーが守られ、対象者が安心して会話ができる場所であった。面接調査時間は一人あたり 80 分から 120 分であった。

面接内容 面接内容は、以下のことを尋ねた。

- ① 基本プロフィール：職歴、年齢、職業に関わる資格や免許、家族構成について。
- ② 母親の教職の職業選択への影響：職歴にある職業を選択した最初のきっかけ、職業選択までの選択肢の変遷、選択肢の中から現在の職業を選んだ理由について。
- ③ 教員である母親に対する認識、母親との関係の良さ：「フルタイムで働く母親」に対する認識の変遷、「教員である母親」に対する認識の変遷、母親との関係の良さについて。

- ④ 母親の教職による母親との関係における心理的葛藤：母親が「先生」であることで母親に対して悲しい気持ちや満たされない気持ちを抱いた体験，そのときの気持ち，その後の考えや行動への影響について尋ねた。内田(2016) のデータを参考に具体例として，母親の帰宅時間が遅かったこと，母親が行事に来られなかったこと，母親が病時に対応できなかったこと等を挙げた。また，対象者が母親に相談をした場合にどのように対応されたと思うかについて尋ねた。
- ⑤ 母親の教職による周囲からの評価による影響：母親が「先生」であることで周囲の人から何か評価を受けたり，期待されたりした体験，そのときの気持，その後の考えや行動への影響について尋ねた。

分析方法 複線径路・等至性モデル (TEM) による分析を行った。職業選択について高い継承性が見られることから，母親の職業を継承することを意味すると考えられる「教職を選択する」を等至点 (以下，EFP)，継承しないことを意味すると考えられる「教職を選択しない」を両極化された等至点 (以下，P-EFP) として分析を始めた。なお，EFP，P-EFP は分析を進めるなかで，対象者にとってより意味のある内容が見えてきた場合は変更して分析を進めることができる。また，等至点に向かわせる力である SG (社会的ガイド) と等至点に向かうのを阻害する力である SD(社会的方向付け) を，母子関係から起こるものと，外部から起こるものに分けて分析を行った。

分析手順 安田・滑田・福田・サトウ(2015ab)を参考に以下の手順で行った。①逐語記録から，(1) 職業選択，(2)母子関係，(3) 「先生の子ども」独特の経験についての語りをそれぞれ分けて抽出し，意味のまとまりごとに切片化した。このとき，(1)～(3)のなかで重複して抽出される語りもあった。②切片化された語りに見出しをつけ，(1)～(3)それぞれを対象者ごとに時間経過に沿って並べた。③対象者それぞれの TEM 図を作成し，可視化された径路を比較して，Table 2 のように類型化した。④類型ごとの径路を Figure 2 に示した。

Table 2. 対象者の職業選択と母親への印象を基準とした類型化

| | 職業選択 | 教員である母親 | 母親である母親 | 対象者 |
|-----------|------|---------|---------|-------|
| I 両立継承型 | 教職 | 肯定的 | 満足 | E,F,I |
| II 教職継承型 | 教職 | 否定的 | 不満 | D,G |
| | | 肯定的 | 不満 | C,H |
| III 母親継承型 | 教職以外 | 否定的 | 満足 | A,J |
| IV 非継承型 | 教職以外 | 否定的 | 不満 | B |

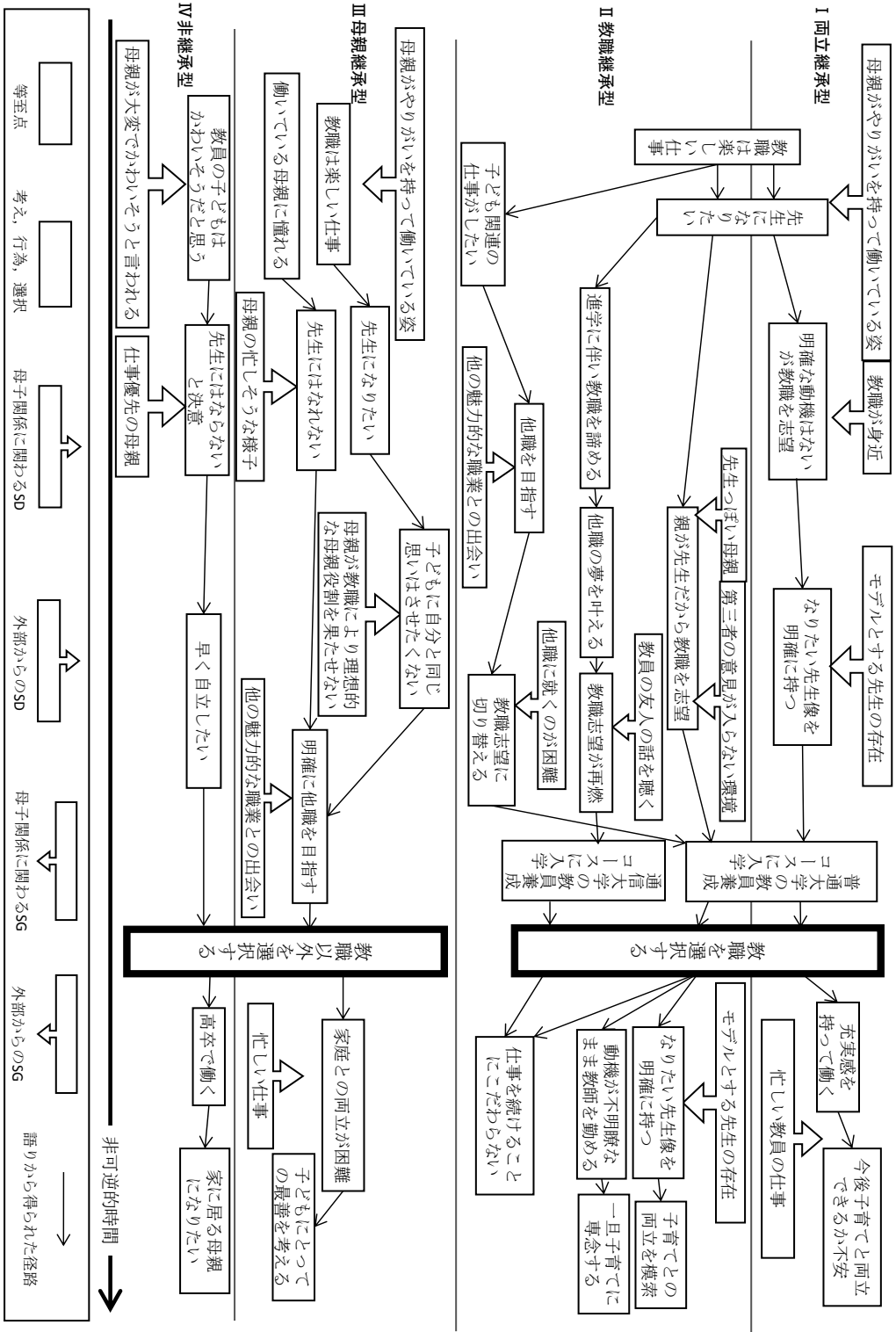


Figure 2. 母親が「先生」である娘の職業選択のプロセス

以下、類型ごとの特徴を記述する。Figure 内のラベルは【 】で示す。

I 両立継承型 教職と母親の両立を母親から継承しているタイプであると考えられる。母親が対象者の母親としての役割も果たしつつ、【母親がやりがいを持って働いている姿】を見て育てており、小学生頃から【教職は楽しい仕事】であると感じて、【先生になりたい】と思い始めていた。また、家庭でも教職関連の本や親の話に触れることで【教職が身近】であることで、その後も【明確な動機はないが教職を志望】する状態が維持されていた。その後、対象者それぞれの尊敬できる先生との出会いがあり、【モデルとする先生の存在】により、【になりたい先生像を明確に持つ】ようになっていた。その後も教員を目指しており、【普通大学の教員養成コースに入学】した時点から、【教職を選択する】ことが決定したと考えられる。就職後は、生徒との関わりを楽しんだり、生徒の成長を感じながら【充実感を持って働いて】いた。しかし、【忙しい教員の仕事】に自身の母親が家庭で仕事の疲れを見せていなかったことや、母親の頑張りや凄さに気づき、【今後子育てと両立できるか不安】を抱いていた。今後は、母親が教職と母親役割を両立させていたことをもとに、職業的な自己実現と母親役割の両立を目指すことが推察される。

II 教職継承型 教職を選択しつつも母親の母親役割の遂行には不満があったタイプであると考えられる。上段の径路では、【母親がやりがいを持って働いている姿】から両立継承型と同様に、【教職は楽しい仕事】であると感じて、【先生になりたい】と思い始めていた。その後も、【教職が身近】な家庭環境から、教職志望が維持されている。しかし、【先生っぽい母親】のもので、母親の意見が絶対的な状況で自身の話を受容的に聴いてもらえた経験がなかったこと、職業的に社会から認められている母親であることから反抗できない歪な母子関係が形成されていた。そのことから、対象者は中高時代も相談ができるような深い友人関係が築けず、【第三者の意見が入らない環境】に育っていた。歪な母子関係から、対象者の主体性や、職業選択の視野を広げる力が育っておらず、【母親が先生だから教職を志望】という曖昧な動機で教職選択に至っていた。教職選択後に、母子関係を見つめ直すきっかけとなる先生と出会い、【モデルとする先生の存在】を得て、【になりたい先生像を明確に持ち】、【子育てとの両立を模索】していた対象者と、【動機が不明瞭なまま教師を勤め】、【一旦子育てに専念】していた対象者が見られた。

下段の径路では、【母親がやりがいを持って働いている姿】から両立継承型と同様に、【教職は楽しい仕事】であると感じて、教員である母親への憧れや【先生になりたい】気持ちを持っていたが、他職志望の挫折や他職での自己実現を経て、教職を選択していた。また、教職選択後、【仕事を続けることにこだわらない】特徴が見られた。教職継承型には多様な径路が示されたが、職業的な自己実現と母親役割の遂行については、対象者それぞれのバランスを取りながら選択していくと推察される。

III 母親継承型 母親役割としての母親のみを継承しているタイプであると考えられる。家庭環境から自然と教員である母親や【働いている母親】に憧れるが、【母親の忙しい様子】や【母親が教職により理想的な母親役割を果たせない】体験を基に、教職は選択せず、【明確に他職を目指し】ていた。一方、母親の母親役割の遂行はおおむね理想的と捉えており、肯定的であった。母親の影響で教職以外を選択するが、母親と同様【仕事と家庭との両立が困難】である状況に直面した場合は、

【子どもにとっての最善を考え】ていた。母親とは違う形での職業的な自己実現と母親役割の両立を目指す、両立に葛藤した際には母親役割の遂行を重視すると推察される。

IV非継承型 母親が教員役割に専念し、対象者の母親としての役割は家族に任せている様子を見て育てており、周囲から【母親が大変でかわいそうと言われる】体験から、【教員の子どもはかわいそうだと思う】ようになっていた。また、【仕事優先の母親】で、疲れ切っていて自分の重要な話も聴いてくれない体験を重ねたことから、【先生にはならないと決意】していた。その後は、【早く自立したい】とこの対象者のみ大学進学を選択せずに働き始めていた。【仕事優先の母親】に対する子ども時代の葛藤が大きく、母親に好かれたい気持ちが強い一方、母親役割を果たしてもらえなかったことへの不満も抱いていた。母親の在り方について、母親が不在であったことから自分は子どもを家で温かく出迎えられるような【家に居る母親になりたい】としていた。母親のような職業的な自己実現を目指さず、母親役割についても遂行したいという明確な希望や理想は持たないタイプであると推察される。

考察

本研究では、「先生」の子どものうち、特に女性の子どもを対象に検討を行い、I～IVのように多様な在り方が見られた。一方で、10名中7名が教職に就いている、または就く予定であり、教員の子どもの職業継承率の高さが伺われる結果となった。このことは、Figure 2に見られるように、【母親がやりがいを持って働いている姿】や、【教職が身近】な環境に育ったことが影響していると推察される。

Figure 2を社会的方向付け・社会的ガイドに着目して概観すると、教職を選択した対象者では、母子関係のなかで、【教職を選択する】に向かわせる力を認識して影響を受けており、逆に【教職を選択しない】に向かわせる力はあまり認識しておらず、影響を受けていない者が多かった。一方で、教職以外を選択した対象者では、母子関係のなかで、【教職を選択する】に向かわせる力を認識して影響を受ける部分も見られたが、【教職を選択しない】に向かわせる力のほうをより多く認識し影響を受けていた。【教職を選択しない】に向かわせる力は、【他の魅力的な職業との出会い】の他に、対象者自身の母親の様子をみるなかでの、教職の忙しさや母親役割のままならない状況があったことであった。このことから、ほとんどの対象者は【教職を選択】するにも、【教職を選択しない】にも母親から影響を受けていることが考えられる。「先生」である母親は、職業人としても、母親としても対象者の人生の選択を行っていくうえでの根本的なモデルのひとりであることが言える。

さらに、社会的方向付け・社会的ガイドが発生する場について検討すると、【先生っぽい母親】【仕事優先の母親】などの対象者の母子関係のなかで発生しているものと、【母親が大変でかわいそうと言われる】、先生の子ども扱いされるなどの周囲の社会から発生しているものが見られた。対象者が受ける影響が、母子関係のなかだけに留まらず、社会的に発生しているレッテルなどにもあることは、対象者の受ける影響を複雑にしていると考えられる。そのような複雑な影響を受けるなかで、その状況に葛藤を感じたとき、対象者にとって自身の葛藤の原因を整理していくことは非常に難しく、特殊な状況であることからひとりで抱えやすいことが推察される。

また、多様な在り方のなかにも、II教職継承型の上段の径路の対象者に見られた、【先生っぽい母

親】との独特な母子関係や、IV非継承型の【仕事優先の母親】との母子間葛藤の大きい母子関係には、臨床心理学的な理解を基に支援が必要である状態像があると考えられる。該当の対象者の中には、母子関係に纏わる子ども時代のフラッシュバック様の体験や、アイデンティティ形成がうまく進まない環境を語る者が見られた。また、母親がその職業的側面から社会的に認められていることにより、子ども自身も母親が言うことは社会的にも正しいことだと思い、反抗できない状況があったことを4名の対象者(A,D,G,I)が語っていた。また、その4名は子ども時代に母親が「先生」であるという認識が強かったことも語っていた。そして、母親が先生であるという認識の強さから、“良い生徒であらねば”というような自らの行動を制限する考えを持っていた。一方で、I両立継承型については、母親の「先生」の側面を家庭内であまり感じておらず、自身の母親としての認識が強かった。また、母親が仕事の忙しさやストレスを家庭に持ち込むことはほとんどなく、家庭では対象者の母親としての役割を十分に果たしていたことが語られていた。

このことから、「先生」の子ども、特に娘の場合では、母親の母親としての面だけでなく、「先生」としての面も感じながら育っていることが考えられる。母親が「先生」であるという事実だけでなく、家庭でも子どもに固いルールや正しさを重視するような【先生っぽい母親】として子どもに接することで、子どもは自身が「先生の子供」であるという認識を強めていくことが推察される。そして、「先生のこども」であるという認識の強さに伴い、成績や素行に気をつけなければならないという要求や制限を、親から要求されていなくても感じている対象者が見られた(A,D,G)。「先生」の子どもの母子関係において、母親が家庭内で、生徒や仕事の話ばかりをしたり、子どもの気持ちを汲まず正しいことを教えたりするような関わりをすること、また、子どもの気持ちを汲む余裕がないほどの仕事を求められることは、子どもの母子関係に対する葛藤に影響することが示唆される。

引用文献

- Bogenschnider, K., Small, A. A., & Tsay, J. C. (1997). Child, parent, and contextual influences on perceived parenting competence among parents of adolescents. *Journal of Marriage and the Family*, 59, 345-362.
- ベネッセ教育総合研究所 (2010). 第5回学習指導基本調査報告書 (小学校・中学校版) ベネッセコーポレーション Retrieved from <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3243> (January 19, 2017).
- Hoffman, L. W. (1963). Mother's enjoyment of work and effects on the children. In F. I. Nye and L. W. Hoffman (Eds.), *The employed mother in America*, Chicago: Rand McNally, 95-105.
- 細江容子 (1996). 教員のライフコースとキャリア 上越大学研究紀要, 16, 37-48.
- 神奈川県教育研究所 (1952). 教職員の生活時間構造分析に関する調査研究, 教職活動についての実態調査Ⅲ 神奈川県教育研究所
- 直井裕紀・佐藤裕起子 (2013). 中学校教員のワーク・ライフ・バランスとその背景 茨城大学教育実践研究, 32, 71-80.
- 落合貴美子 (2009). バーンアウトのエスノグラフィー—教員・精神科看護師の疲弊— ミネルヴァ書房

- 小川一夫・田中宏二 (1981). 職業継承性と親子関係—教師職・公務員職における娘の職業継承—
年報社会心理学, 22, 163-178.
- 小川一夫・田中宏二 (1985). 職業選択に及ぼす親の職業的影響—小・中学校教師・大学教師・建築
設計士について— 教育心理学研究 33(2), 173-178.
- 大谷千恵 (2009). 子育て中の女性保育士・教員の資質と直面している問題 玉川大学学術研究所紀
要, 15, 1-15.
- Percel, T. L., & Menaghan, E. G. (1994). *parent's jobs and children's lives*. New York: Aldine de Gruyter.
- Rallings, E. M. and Nye, F. I. (1979). Wife-mother employment, family, and society. In W. R. Burr, R. Hill, F.
I. Nye, and I. L. Reiss (Eds.), *Contemporary theories about the family: Research based theories*, Vol. 1.
New York: Free Press, 203-226.
- Roeters, A., Lippe, T. V., & Kluwer, E. S. (2010). Work characteristic and parent-child relationship quality:
The mediating role of temporal involvement. *Journal of Marriage and Family*, 72, 1317-1328.
- 齋藤慶子 (2008). 小学校女性教員における職業と家庭の両立問題 日本教育史研究, 27, 35-64.
- 佐藤 学 (1994). 教師文化の構造—教育実践研究の立場から— 稲垣忠彦・久富善之 (編) 日本の
教師文化 (pp.21-41) 東京大学出版会
- 佐藤有耕 (2015). 親の職業と青年期の子どもの親子関係との関連 筑波大学心理学研究, 49, 45-56.
- 末盛 慶 (2011). 母親の就業特性が子供に与える影響に関する研究動向と今後の課題—3 つの理論
仮説と先行研究の検討を通して— 日本福祉大学社会福祉学部 日本福祉大学社会福祉論集,
124, 55-70.
- 高橋桂子・濱岡真末・勝沼真恵 (2009). 新潟市公立小中学校教員のモチベーション要因, ストレス
要因とワーク・ライフ・コンフリクト 新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,
8, 49-60.
- 高橋桂子・小谷スミ子・五十嵐由利子 (2001). 教員生活と子育ての両立に関する事例研究—長岡女
子師範学校卒業生へのヒアリング調査から 新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究
紀要, 3, 317-325.
- 田野井真美・水本徳明・大久保一郎 (2012). 中学校教員のワーク・ライフ・バランス—生活時間と
役割葛藤の視点から— 日本家政学会誌, 63(11), 725-736.
- 内田早香・岡本祐子 (2016). 小中学校教員の子どもの親の職業に起因する心理的経験の検討 —母
親／母親の教職に対する捉え方の差異の発生要因— 広島大学大学院心理臨床教育研究センタ
ー紀要, 15, 41-55.
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編) (2015a). TEA 理論編 複線径路等至性アプロ
ーチの基礎を学ぶ 新曜社
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編) (2015b). TEA 実践編 複線径路等至性アプロ
ーチを活用する 新曜社